２０１４年7月１５日発行（季刊）

う 羽 化 か

ISSN1880-8646
2014年7月
第 ９９ 号

横 浜 漢 点 字 羽 化 の 会
〒231-0851 横浜市中区山元町2-105 Tel 045-641-1290
発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣
編集責任者 木 下 和 久

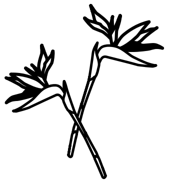
目 次

漢点字の散歩（37） （岡田健嗣） …………………… 1
点字から識字までの距離（93）（山内 薫） ……………… 10
東京漢点字例会報告とわたくしごと（木村多恵子）…… 16
漢文のページ ……………………………… 23
ご報告とご案内 ……………………………… 25
編集後記 （木下和久） ……………………… 27

漢点字の散歩（三十七）

岡田　健嗣

万葉集初体験（二）



《古代日本人が国家の意識をはっきり持ちはじめ、神々と人間との分離を知りだした第一歩は、仁徳～雄略朝あたりに求めることができる。『古事記』が、神々の物語である上巻（天之御中主神（あめのみなかぬしのかみ）～鵜葺草葺不合命（うがやふきあえずのみこと））、神と人との物語である中巻（神武～応神）、純粋に人間の物語である下巻（仁徳～推古）の三巻に分かれ、その下巻を仁徳天皇からはじめている構造を掘りさげてゆけば、右の認定がたやすく得られる。『宋書（そうしょ）』倭国伝（わこくでん）における「倭（わ）の五王」の始まりを仁徳王朝に擬する考えがあるのも、そうした探究による成果である。／

　仁徳朝以降、人びとの心に培われた神人分離の認識は、欽明～推古（六世紀後半～六二八年）、とくに推古朝に至って時期を画した。聖徳太子による冠位十二階制（六〇三年）や十七条憲法の制定（六〇四年）、大陸との正常な国交の開始（六〇七年）や仏教統制機関の設置（六二四年）などは、推古朝における国家意識の飛躍を物語る。また、天皇記・国記・本記（ほんぎ）などが編まれたこと（六二〇年）は、推古朝が古代における歴史体系の未曾有の獲得期であったことを示す。人間の個の自覚は、国家意識の生成と密接にかかわる。／　抒情詩の個性は、集団を構成する人間が国家の確立による統一的な秩序や機構によって制約をうけ、一定の義務や権利を与えられて矛盾や喜びを感じる時に形成されてくるといわれる。記紀に収められる古代歌謡ならぬ万葉和歌が、推古朝を継ぐ舒明朝頃から急増し、新しい相貌を見せてくるのは偶然ではない。万葉の時代を築きあげた天智・天武両帝や持統女帝の、父であり祖父である人が舒明天皇であったために、『万葉集』においてとりわけ舒明朝が重んぜられたという事情も考え合わせなければならないものの、舒明朝あたりが万葉の黎明（れいめい）であったことは否定できないであろう。そして、このことを身をもってあかすのが、舒明御製の歌柄（うたがら）であり、その歌を二番歌（にばんか）として開巻冒頭歌の直後に据えた巻一の構造である。／（以下略）》

　以上は本誌前号の本欄に引用した『萬葉集釋注』の編著者である伊藤博先生が、「釈文」に記された文です。推古天皇の即位とともにわが国が、国家を為すべ

く矢継ぎ早に手を打ち、それを継ぐ舒明天皇とその後継である天智・天武そして持統天皇のお姿が、この『万葉集』の中に見えてきます。手元の『広辞苑』の年表を見ても、神武天皇・仁徳天皇・雄略天皇というわが国の創世に多大な功績のある天皇のお名前は見えず、この推古天皇から西暦に並列されるようになっています。いわゆるわが国の歴史時代は、この推古天皇の時代に始まったと言っているのです。ここで言う国家とは何を指しているのか、これは極めて重要な課題と言えます。

　国家の起源には多彩な論や説があるようです。私が学生であったころは、わが国の国家の起源と言えば、その早々期を弥生時代としていました。つまりわが国の歴史の早々期を縄文時代（前１万年超～前５世紀あたり）として、当時はまだ国家としての体裁はなく、人々は定住せず、生業は狩猟と採集経済に委ねられていたとされていました。ただし、各地の遺跡や貝塚から、当地の産物でない物（黒曜石や曲玉など）が出土することは珍しくなく、そのことから既に、何らかの交易が盛んに行われていたらしいことが伺われるとされていました。

　しかし今から20年と少し前に、青森県の三内丸山で、驚くべき発見がなされました。広辞苑に以下のように紹介されています。

≪【三内丸山遺跡】／青森市南西部にある縄文時代前期中頃～中期の大遺跡。１９９２年からの発掘で、竪穴住居・掘立柱建物・墓などのほか、溝・柵・道や大規模な土木工事痕跡などを発見し、多くの遺物も出土。≫

　国家の起源を人々の定住と集中、社会的な役割の発生と分業化などに求めれば、既にこの三内丸山に営まれた集団は、国家と言ってよいものに他なりません。わが国の国土に生きる人々にも、決して遅くない時期から、国家と呼んでよい生活が営まれていたのでした。それは縄文時代の中程と推定されていて、その時期は紀元前６、５０００年であろうと言われています。

　また縄文時代と歴史時代の間に、弥生時代があります。この時代も炭素の同位元素の分析の結果、その始まりを紀元前5世紀とされていたのが、前10世紀へと遡っています。前10世紀と言えば大陸では、周王朝が殷王朝を滅ぼした易姓革命の時期に重なります。北の

周が南の殷を滅ぼすことを南進と言いますが、この南進とわが国の弥生時代の訪れが、無関係とは言い切れないように思われてなりません。

そうしてみると一つ興味深いことに気づかされます。

私たちが歴史を捉えるとき、学校で学んだ教科書には、四大文明から説かれています。西からエジプト、メソポタミア、インド、中国の四つ、それぞれにナイル川、チグリス・ユーフラテス川、インダス川、黄河という大河の辺に起こったとされています。

これらの文明は、エジプト、メソポタミア、インドは、それぞれに交通が盛んであったらしいこと、中国でも、黄河・長江両大河による交通が盛んであったらしいこと、このような交通（交易や戦争）が、小さく点在していた初期の小国家を集約し巨大化して、大文明圏を形成して行ったらしいこと、初期の小国家はそれによって役目を果たして吸収され消滅して行ったこと、大文明圏はそのまま巨大化して、エジプト、バビロニア、ペルシア、インド、殷と、現代に繋がる国家を形成して行ったのでした。私たちが学校で学んだ歴史によれば、ここからが歴史の始まりということになっています。

ところで今回発見された三内丸山を年代から見てみると、古エジプトやシュメールの初期に該当しはしますが、中国でもまだ国と言える国は成立してはいない時期です。そうしてみると、この三内丸山に成立していた集団・社会を国家と呼べるとするならば、共時的には、決して偏狭な地域・社会ではなく、恐らく普遍的な、世界の何処にも成立していた国家の一つであったに違いないと言うことができます。そのような初期の国家が、世界文明の巨大国家へと変貌しなかったばかりか、やがて消滅する運命にあったことは、一体どういうことだったのであろうかとつい思ってしまいますが、しかしこれも、世界の何処にでも起きていたことで、取り立てて珍しくないことでした。ただその後のエジプトから中国とその周辺に至るユーラシア各地の抗争と諸国家の興亡を歴史のダイナミズムと見るならば、わが国の国土に占める人々の営みは、未だ歴史に参加するには時日を要するものだったと言えるのも事実だったのでした。そのようにしてわが国が、歴史の流れに位置を占めて姿を現し始めたのが、この推古天皇の時代であったのでした。普遍の一つであった社会が、何時の間にか偏狭に堕していることに気づかされたのが、この時代だったと言えるのかもしれませ

ん。このような歴史へのデビューが幸福なものであったのか、多少疑問に思わないではおられないのも、それまではなかった国際関係に、否も応もなく引き出されざるを得なくなってきたことが、このような事態に至った理由と思われるからです。

世界のレベルでそれ以前を見てみると、わが国が中国の資料にその名を顕したのは、あの有名な「魏志倭人伝」と呼ばれる三国時代の魏の歴史書だったようです。紀元後３世紀ころと言われます。それ以前はなかったかと言えば、秦の始皇帝が不老不死の妙薬を求めて、徐福という人物を東海の島に送ったという記事が、司馬遷の「史記」にあると言います。そしてわが国でも、和歌山県・紀伊半島に、その徐福を祀った碑があるとも言いますし、各地に秦の文字の入った地名が残っていて、徐福とともに渡来した人々が移り住んだところだと言われてもいます。真偽の程は誠に詳らかにはできませんし、誰がどの時点でそのようなことを言い出したのか、実に不思議な話と言わずにはおられませんが、このような伝承が伝わるほどに、わが国と大陸とは、深い関係にあったと捉えることには、何の不足もございません。

中国の全土は、秦の始皇帝によって統一されましたが、始皇帝の死後直ぐに各地で乱が起き、漢の劉邦と楚の項羽が覇権を争って、漢が国土の統一に成功したのでした。前漢・後漢と漢の時代が４００年ほど続きましたが、２世紀の半ばを過ぎたころから漢の王朝の力も衰えを見せ、三国時代へと流れ込みます。その後晋が統一するなどの六朝時代を経て、五胡十六国、南北朝、そして隋の統一に至って一つの王朝の統一国家が成立します。その隋も直ぐに唐に代わってやっと落ち着きを見せますが、この隋の時代と、わが国の推古朝の時期が重なります。

この中国の隋・唐の統一は、わが国に何をもたらしたのでしょうか？

推古天皇は初めての女帝で、弟の聖徳太子が摂政として政務を司りました。その事績は右に伊藤先生が述べられておられますように、冠位十二階の設定と憲法十七条の公布に象徴されます。

冠位十二階とは、朝廷内の位を冠で表すことで、広辞苑に、「冠位の最初のもの。六〇三年に聖徳太子・蘇我馬子らが制定した冠による位階。冠名は儒教の徳目を参考にして徳・仁・礼・信・義・智とし、おのおのを大・小に分けて十二階とした。各冠は色（紫・青・赤・黄・白・黒）とその濃淡で区別、功労によって

昇進。蘇我氏は皇室と共に授ける側にあった。」と紹介されています。朝廷内の位を冠とその色で表すこと、昇進は功績の評価によって決まるというものでした。官僚組織の構築が如何に急がれたかがよく分かります。

推古天皇を補佐した聖徳太子のお仕事のもう一つは、十七条憲法の制定です。全文が引用されることはほとんどございませんので、ここにご紹介致します。広辞苑の資料から抽出しました。私も初めて読みましたが、誠に新鮮に感じました。

一に曰く、和なるを以て貴しとし、忤（さか）ふることなきを宗とせよ。

二に曰く、篤く三宝を敬へ。三宝とは仏・法・僧なり。

三に曰く、詔を承りては必ず謹め。

四に曰く、群卿百寮、礼を以て本とせよ。

五に曰く、餮を絶ち欲することを棄てて明かに訴訟を弁（さだ）めよ。

六に曰く、悪を懲し善を勧むるは、古の良き典なり。是を以て人の善を匿（かく）すことなく、悪を見ては必ず匡（ただ）せ。

七に曰く、人各（おのおの）任有り。掌ること濫れざるべし。

八に曰く、群卿百寮、早く朝（まい）りて晏（おそ）く退でよ。

九に曰く、信は是れ義の本なり。事毎に信有るべし。

十に曰く、忿を絶ち瞋を棄てて、人の違ふことを怒らざれ。

十一に曰く、功過を明かに察（み）て、賞し罰ふること必ず当てよ。

十二に曰く、国司・国造、百姓に斂（おさめと）らざれ。国に二の君非ず。民に両の主無し。

十三に曰く、諸の官に任せる者、同じく職掌を知れ。

十四に曰く、群臣百寮、嫉み妬むこと有ること無かれ。

十五に曰く、私を背きて公に向（ゆ）くは、是れ臣が道なり。

十六に曰く、民を使ふに時を以てするは、古の良き典なり。

十七に曰く、夫れ事独り断（さだ）むべからず。必ず衆と論（あげつら）ふべし。

〈日本古典文学大系〉日本書紀

今から１５００年前に書かれた戒めですが、民主主義社会と言われる現代にも充分通用するものと思われてなりません。官僚組織の構築と、法と倫理の中央からの規定は、それまでは感じなくて済まされた国際関係の緊張がもたらしたものでした。唐は、隋の王朝から禅譲を受けて、その勢いのまま朝鮮半島に進出してきます。わが国はそれまで密接な関係にあった半島の百済を支えるために派兵を余儀なくされます。このような緊張状態から国家意識が芽生え、官位制度を整備し、憲法を制定して、国土と組織としての国家の保全こそが、国家運営の第一義的な目的となって参ります。このようにして急速に国家を意識の上に乗せることになって、わが国を国家ならしめているものが何か、それを証することが必要であることが、推古朝以降の朝廷の人々の心を占めるようになりました。

推古天皇以降女帝の治める時代が断続的に続きます。推古朝では天皇の弟の聖徳太子が摂政を務めて、国家の運営と舵取りを担いましたし、その後の女帝・皇極・斉明朝では、息子の中大兄皇子がその任に当たりました。聖徳太子は天皇の位に即くことはありませんでしたし、中大兄皇子は、即位後天智天皇として豪腕を振るいましたが、それまでは長く母の皇極・斉明天皇を補佐して、国家としてのわが国の基を築かれました。その後の女帝の持統天皇は、夫の天武天皇の崩御の後、子の草壁皇子の即位を望んでいましたが、皇子は大変病弱で、止むなくご自身が皇位に即かれました。間もなく皇子は身罷られて、その子、天皇にとっては孫に当たる文武天皇の成長を待つことになったのでした。このような経緯からすると、持統天皇はいかにも中継ぎのために即位されたように写りますが、夫天武天皇が道半ばにした藤原京の造営、飛鳥浄原令（あすかきよみがはらりょう）の施行、大宝律令の公布など、律令国家の基礎を築くという、大事業に辣腕を振るわれたのもこの持統天皇でした。

その後孫の文武天皇が即位しましたが、その父と同様病弱で、母の元明天皇が、文武天皇の子・聖武天皇への中継ぎとして即位しました。さらに聖武天皇の姉である元正天皇が即位した後、やっと期待されていた聖武天皇の即位となりました。

この時代は推古天皇から皇極・斉明天皇、持統天皇、元明天皇、元正天皇と女帝が帝位に即いた時代でしたが、同時に、わが国を国際関係に耐え得る国家ならしめるよう力を尽くした時代でもありました。推古朝での官僚組織の構築と十七条憲法による、国家運営の法的・倫理的枠組みの提示、持統朝での律令制度の基礎付けなど、約１００年の時間の中で、現在のわが

国の基礎を築き上げたと言ってよい時代でした。また元明天皇も、聖武天皇への中継ぎという位置づけと見えながら、『古事記』を712年に、『日本書紀』を720年に完成させ、その他にも各地の風土・物産・文化を記した「風土記」の編纂を求めたり、わが国最初の貨幣である和同開珎を鋳造したりなど、大いに腕を振るわれました。このようにして大急ぎに急いだ国家の体制作りも一つの完成を見ることになり、聖武朝にバトンタッチすることができたのでした。

　記紀の編纂は言わば国家プロジェクトで、中でも『日本書紀』は、わが国の正史と位置づけられています。正史を編むということは、わが国の拠って立つ根拠を、国の内外に証しすることになります。中国には文献資料も1000年以上の積み重ねがあります。それに匹敵する資料がわが国にも是非とも必要だと考えられて、編まれたのでした。

　記紀の構成は、先の伊藤先生のご紹介にありますように、神の時代・神と人の時代・人の時代の3部に分けられますが、『万葉集』も、各巻それぞれに、その拠り所とするお歌を、それぞれの冒頭に置く構成になっています。巻第一では、雄略天皇の御製歌、その次に舒明天皇の御製歌を置いて、わが国最初のアンソロジーの開巻を宣言しています。

　巻第二以降はどうなっているでしょうか。ご紹介しましょう。前号同様、お歌の後に振り仮名を、その後に伊藤先生の釈文から、その現代語訳を掲げます。

八五

　君が行き　日長くなりぬ　山尋ね　迎へか行かむ　待ちにか待たむ

　きみがゆき　けながくなりぬ　やまたづね　むかへかゆかむ　まちにかまたむ

　〈あの方のお出ましは随分日数がたったのにまだお帰りにならない。山を踏みわけてお迎えに行こうか。それともこのままじっと待ちつづけようか。〉

八六

　かくばかり　恋ひつつあらずは　高山の　岩根しまきて　死なましものを

　かくばかり　こひつつあらずは　たかやまの　いはねしまきて　しなましものを

　〈これほどまでに恋い焦がれてなんかおらずに、いっそのこと、お迎えに出て険しい山の岩を枕にして死んでしまった方がましだ。〉

八七

ありつつも　君をば待たむ　うち靡く　我が黒髪に
霜の置くまでに

ありつつも　きみをばまたむ　うちなびく　わがくろかみに　しものおくまでに

〈やはりこのままいつまでもあの方をお待ちしよう。長々と靡（なび）くこの黒髪が白髪に変わるまでも。〉

八八

秋の田の　穂の上に霧らふ　朝霞　いつへの方に
我が恋やまむ

あきのたの　ほのうへにきらふ　あさがすみ　いつへのかたに　あがこひやまむ

〈秋の田の稲穂の上に立ちこめる朝霧ではないが、いつになったらこの思いは消え去ることか。この霧のように胸の思いはなかなか晴れそうにもない。〉

以下、伊藤先生の「釈文」より、

《右八五～八の四首は、巻二「相聞」の冒頭を飾る歌。葛城氏から出て、第十六代仁徳天皇の皇后となった磐姫（いわのひめ）が、旅に出て久しく帰らぬ夫仁徳天皇を思慕した歌である。／（中略）／　磐姫皇后をめぐっては、持統朝の頃、異常な嫉妬の物語が伝えられていた。仁徳天皇が異母妹八田皇女（やたのひめみこ）に愛を注いだことを怨んで、山城の筒城（つつき）の宮に引き籠り、その地でひとり寂しく生涯を終えたと『日本書紀』に記し（九〇左注参照）、『古事記』にもほぼ同様な話を伝える。『古事記』の、天皇の妻妾たちが普段と違った物言いをするだけで「足もあがかに」（地団駄ふんで）ねたんだという叙述や、紀伊の国から採集して船に載せてきた祭祀のための御綱柏（みつなかしわ）を、留守中天皇が八田皇女と馴れ親しんでいると聞くや、ことごとく「海に投げ棄て」てしまったという話は、ことに印象が深い。／嫉妬は愛情の裏返しである。そんな磐姫皇后にもこんな反面があったという次第で生まれてきたのがこの四首なのであろう。ここには、たしかに、記紀におけるそれとはまったく異質な磐姫皇后像が造型されている。心はやりながらも、女らしく待とうと内省し、立ちこめて消えやらぬ朝霧のごとく悶々の情に閉ざされる万葉の磐姫像は、すこぶる可憐である。「山尋ね迎へか行かむ」と言ったり、「高山の岩根しまきて死なましものを」と叫んだりしているところには、記紀に語られる磐姫の片鱗が見られるけれども、それを押さえて悩んでいるだけに、第四首の嘆きが強くひろが

る。／　第三首の下の句に多少の破綻が覗いてはいるものの、いちずに綿々と男を思慕する女の姿が切実に描かれるこの四首は、おそらくは主として宮廷の女性たちに提供され、いたくもてはやされたのであろう。四首を享受した人びとは、これを〃あの磐姫皇后〃の一面と信じて感に耽（ふけ）ったのであり、そこに、女の模範を汲み取って心酔したことでもあろう。／　四首が、巻二「相聞」の冒頭に掲げられたゆえんもまたここにあるだろう。四首は、古き世の高貴な女性の恋心を美しくうたった「相聞」の歌の規範として、冒頭を飾ったのにちがいない。そして、四首のあとには、近江朝以下藤原朝まで、白鳳現代の相聞歌群が連綿と続く。公的な「雑歌」の冒頭には男性の高貴（天皇）の歌を、私的な「相聞」の冒頭には女性の高貴（皇后）の歌を、一つさかのぼる古き世の典型として配した処置は、心にくいかぎりといわなければならない。／　磐姫皇后の嫉妬は、彼女が臣下葛城氏の出身で、皇族の八田皇女に比べて格が低い点に一つの由来があろう。有史以来はじめて人臣の出身で皇后になるという経験を持った磐姫にとっての保身の術は、嫉妬しかなかったのかもしれない。天皇への深い愛情に根づいているだけに、それはどんなに強烈であっても最も安心できる戦術だったのではないか。『日本書紀』の記述は、この皇后が筒城の宮でひとり没するや、ただちに八田皇女を皇后に立てたという残酷な筋になっている。けれども、その身に仮託された名作が『万葉集』巻二「相聞」の冒頭に飾られることによって、磐姫皇后の魂は万代ののちまでも安らかに鎮まることになった。》

　磐姫は、仁徳天皇の現皇后です。八田皇女は仁徳天皇の異母妹で、当時は母親が異なれば結婚できたので、皇室の血統からすれば誠に由緒正しい相手ということになります。従って磐姫は、皇后とは言えども勝てない戦を戦ったということになります。記紀には磐姫の尋常ならざる嫉妬の様子が語られているとのこと、実に人間味のある、初々しささえ感じられるエピソードではないでしょうか。このエピソードは持統朝時代にも、「磐姫」と言えば「八田皇女」として、語り継がれていたと言います。

　伊藤先生の解説によると、仁徳天皇は巻第一の冒頭歌の作者とされている雄略天皇より五代前・第十六代の天皇、５世紀前半の天皇、その皇后である磐姫のお歌とされるこの四首は、当時の歌ではない、５世紀前半にはまだこのように整った歌は、作られていない。むしろ巻第二の冒頭に、仁徳天皇に因んだお歌、それ

も相聞のお歌を置きたいと、磐姫のお歌として、この四首が選ばれたものと考えられると言われます。相聞歌の冒頭は、女性のお歌がふさわしい、そこで仁徳天皇の皇后のお歌として、この四首を入れたということ、また八五番の歌は、山上憶良の編纂の『類聚歌林』に収められている歌で、人麻呂の歌の可能性が高いとおっしゃっておられます。またこの四首は、一人の作者の歌ではなく、『万葉集』編纂に当たって編集されたものであろうともおっしゃっておられます。わが国最古の編集者の面目躍如です。

なおもう一方の当事者である八田皇女のお歌は、巻第四・相聞の冒頭に置かれています。

四八四

一日こそ、人も待ちよき　長き日を　かく待たゆればありかつましじ

ひとひこそ　ひともまちよき　ながきけを　かくまたゆれば　ありかつましじ

〈一日ぐらいなら人を待つのもたやすいことでしょう。しかし日を重ねに重ねてこんなにも待たされたのでは、とても生きてはいられない気持です。〉

以下次号

点字から識字までの距離（九三）

野馬追文庫（南相馬への支援）（十一）

墨田区立ひきふね図書館　山内　馨

南相馬へ（三）

南相馬訪問から帰ってきて強く感じたのは「仮設住宅に本があるということだけではなく人的な支援も必要ではないか」ということだった。南相馬図書館の友の会などと協力して定期的な人的支援を考えられないかと思った。この感想に対して大阪のTさんも「私も、今朝、南相馬での子どもたちのこと、本のことを思い返していました。私が抱いた率直な感想を、みなさんの御苦労の中で、言わせていただくなら、五〇ヶ所にもなるであろう仮設住宅に一律の本を、今後も送って行かれるのだろうか？そこにいる子どもに、丁寧に渡すことはできないのだろうか、ということでした。定期的に人がまわって行けば、そこに必要な、あるいは、生きる本が選べるのではないかと思います。定期的な訪問が、埼玉とか、仙台とか、大阪とかから、人が少しずつ出ていくことも全く可能性のないことではないなと思うのですが。帰りのバスは、旅程の半分くらいまで、運転手さんと二人きり、あれこれ、

お話しをしました。震災で仕事を失ないバスの運転手になられたそうです。家の両隣は、子どものために避難されて空き家になっているけれど、何より大事なのは、子どもたちの幸せな将来だと話しておられました。」

Kさんからは下記のようなメールが届いた。

「二回の南相馬での支援を終えました。もう頭も心も満杯状態です。今回の原町牛越仮設住宅は、子どもの多いところで野馬追文庫の本が、今までの中では一番活用していただいている気配がありました。野馬追文庫以外の本は少ない状態でした。山内さんたちと別れたあと、生活相談員のお二人にくっついて二軒の戸別訪問に同行させてもらいました。第四集会所対象の住宅は要介護支援の方たちばかりが住んでおられ、玄関に一軒一軒警報器がついていました。視覚障害の女性と男性のお話を伺うことができました。女性の方は大変な読書家でいらして、震災後数日間動けずにいらして助け出されるまで、あとこの残りの飲み水がなくなってしまったら……というそのギリギリのところで五味川純平の『戦争と人間』の一節が思い浮かび、その極限状態に比べれば自分はまだ頑張れると、がんばったと言っておられて……。国会図書館や福島点字図書館の本は読み尽くしてしまったとおっしゃっておられました。本が読みたい読みたい、本はいいよいいよと言っておられて五木寛之・司馬遼太郎・宮尾登美子など、歴史もの、ミステリーものなど、人間の心の深いところを描いているような作品を読みこなしておられました。男性の方は墨田区に住んでいたこともあるということでした。本はあまり好きでなくラジオで歌を聴くのが楽しみなようでした。家にずっと閉じこもっているようで、新潟の三条市から最近この仮設に移ってきたようですが夏中ずっと家にいてクーラーの中だったので、暑かったことは感じず、ずっと長袖で半袖を着なかったと言っておられました。昼食の時に見つけたチラシ「ちゅーりっぷ文庫」のWさんに前夜連絡を取ってみました。副館長のHさんも図書館のおはなし会に入ってる文庫さんだが仮設の支援ができる余裕があるかなぁ？と言っておられました。Wさんは自宅で文庫を開いていて出かける余裕はありそうでした。仮設には既におはなし会の支援が入っていると聞いていましたと、機会があれば、近くの仮設に出向いたりすることは可能なようなお話でした。山内さんの言う、「人的支援」焦らずに、でもそれこそが本当に大事なことでひとつひとつ進めていきましょう。」

県立図書館のSさんからも「相手の状況に合わせて、厳選した本を手渡しするということが、大切なの

だと感じています。野馬追文庫では、それができているのだと思いました。本を読みたいという人もいれば、本どころではないという人もいます。帰ることを決めた自治体では、補償金を打ち切られるという話も聞きました。福島では地域や自治体によって、状況が異なります。避難してきた方々を受け入れている自治体の図書館も、避難してきた方々へのサービスについて考えています。仮設住宅への移動図書館を検討している図書館もあります。また、仮設住宅にこもりっきりにならないように、「図書館へきてください」と呼びかけをはじめた図書館もあります。まだまだ、これからなので、私も息切れしないようにがんばりたいと思っています。」という報告を頂いた。

ところで私たちの訪問が地元の新聞「福島民報」の二〇一二年一一月二六日「仮設住宅だより」に写真入りで報じられた。

「読み聞かせ、工作楽しむ　南相馬・牛越
児童書寄贈の二人訪問」

南相馬市の各仮設住宅に「野馬追文庫」として児童書の寄贈を続ける埼玉県の臨床心理士撹上久子さん(五八)と、東京都墨田区立あずま図書館の山内薫さん(六三)は二十三日、同市原町区の牛越仮設住宅第二集会所で読み聞かせを行った。日本国際児童図書評議会や日本ペンクラブなどでつくる「子どもたちへ　あしたの本プロジェクト」の主催。撹上さんと山内さんは昨年八月に市内の仮設住宅十八カ所に各十冊ずつ児童書を贈った。現在は市や市社会福祉協議会と連携し、毎月十一日に市内の各仮設住宅に二冊ずつ児童書を届け、息の長い支援を続ける。

読み聞かせでは絵本「おおきなおおきなおいも」を一枚の紙に再現した「巻紙芝居」を披露した。多くの住民が訪れ、松ぼっくりを利用した工作や折り紙などを楽しんだ。

新聞社の取材では、翌年三月に高知こどもの図書館の野間追文庫支援について朝日新聞高知版がかなり大きく取り上げた。

高知からつながる　震災二年(下)
高知こどもの図書館
「笑顔の時を　絵本定期便
寄付募り被災地に七〇〇冊」

三月二日、高知こどもの図書館(高知市)のF館長は、図書館のカウンター近くで絵本を一冊一冊段ボール箱に詰めていた。「おおかみと七ひきのこやぎ」「おちゃのじかんにきたとら」「こすずめのぼうけ

ん」…。ぜんぶで三五冊。東京経由で福島県南相馬市に届けられる。

「絵本を開いて閉じるまでの一〇分間は色々なところに冒険に行けて、ワクワクできる。子どもたちに絵本を通して笑顔になってほしい」との願いを込める。

毎月一回、東日本大震災が発生したのと同じ一一日に、南相馬市の仮設住宅三四カ所の集会所に絵本を贈る「野馬追文庫」プロジェクトだ。日本国際児童図書評議会（東京）など四団体の主催で、高知こどもの図書館は昨年秋から加わっている。

東日本大震災が起きたとき、図書館としてなにができるだろう、と考え、発生翌月にはカウンターの脇に「被災地の子どもたちへ絵本を届けよう」と書いた箱を置いた。同じことを考えた東京の絵本専門店を通して、福島や宮城、岩手の小学校や保育所に贈ったのが最初。その後野馬追文庫を通じて送った本と合わせ、高知からの寄贈は約七〇〇冊にのぼる。

「だっこ」（アリス館）は、F館長自らが購入してまで読んでほしかった本だ。

ページをめくるたび、お母さんに抱っこされたパンダの赤ちゃん、ペンギンの赤ちゃん、ゴリラの赤ちゃん、ゾウの赤ちゃん…の写真が出てくる。みんなとっても幸せそうだ。」思わず『かわいい』と口に出してしまうでしょ。読み終わったら子どもを抱きしめてあげて。あったかい気持ちになれると思う」

いの町のフリーデザイナー有光さやかさん（四五）はインターネットでこの活動を知り、今冬、娘二人に読み聞かせてきた二〇～三〇冊の絵本を寄贈した。次女モエさん（一五）と一冊ずつ手にとりながら選んだ。この本は落書きがあるからやめておこうか、この本は覚えるぐらい何回も読んだね…。話は尽きなかった。「いい時間が過ごせました。」と言う。

『思い出が詰まっていて離れがたくもあったけど、娘たちは絵本の中の冒険や夢を糧にして成長してきた。誰かの心の栄養になってもらえたらうれしい」

絵本はまず南相馬市社会福祉協議会のRさん（五五）のもとに送られ、Rさんらによって仮設住宅の集会所に届けられる。子どもたちが何人かで一冊の絵本を読んだり、一人で真剣な表情で読んだりする姿を見てきた。

「立派な図鑑や季節に合った絵本など、毎回いろいろな種類があり、今月はどんな本が届くのか楽しみにしているんです」本が届く一一日ごろに集会所をのぞきに来る子どももいるという。仮設住宅には、異なる地域から来た子どもたちもいる。「集会所に絵本があることで共通の話題が生まれる、本を通して友達にな

っているようです」
　高知こどもの図書館に最近集まるのはひと月に二〇冊ほど。震災直後には約五〇冊が寄せられたこともあったが、F館長は「それでも毎月絵本を持ってきてくれる人がいる。被災地を忘れていないという気持ちの表れだと思うのです。冊数は少なくても、プレゼントしたいと思う本を、地道に贈り続けていきます」と誓う。（浦島千佳）（朝日新聞高知版二〇一三年三月一三日）

　この記事に対してKさんは次のような感想を送って下さった。

「私にもこの記事の前に取材があり、結構長くいろいろとお話をさせてもらいました。ちょうど三月一一日のことで、色々と思うことがありました。批判とかこの記者さんを責めているとかということでなく、これからの私の話を読んでください。

　私は、世界のバリアフリー絵本展で、何度も何度もメディアの取材には慣れています。ある程度の編集や方向性を前提の報道に慣れています。ただ、それは絵本展とかなら自分でもゆずれるものだったんだと思いました。震災という悲惨な体験、自分の心もいっぱい痛めながら被災したみなさんのこころのすごく痛いところにまなざしを向けている場合、同じようなことでも、自分自身が敏感になってしまって、ふだんなら受け入れられることでも、受け入れられなくなっている自分に時々気付かされることがあります。

　今回もそんな気分に襲われました。この記者さんは、絵本にどんな力があるのかを知りたい、と盛んに子どもたちの様子を知りたがりました。お話会で子どもたちの表情はどうでしたか？どんな本をよろこぶのですか？子どもたちは目を輝かして聞いてるのですか？よろこんでいるのですか？彼女は本を送ることの答えを用意していて、それに合わせてコメントを探しているようで、私はちょっとそれに抗議してしまいました。

　私は自分たちの送った本が子どもたちに何か力になってるのか、お話会で読んだからすぐに子どもたちをはげますのか、そんなことはわからない。特に福島という人類が体験したことのない状況の中の子どもたちに本がどんな力をはたしてくれるのか、わからないでいます。でも本の力に期待して信じてはいる。子どもたちの姿を、自分たちの答えに、自分の物語にはめこんでほしくない。野馬追の支援は、「本」を送っているのではない。気持ちを送っている。それをわかってほしかったなあ・・・。彼女は若い真面目な記者さんに

過ぎず、彼女に何かうらみがあるわけではありません。Ｒさんもその期待に沿って答えてくださったんでしょうね…。震災関連の報道の感動的なお話の多くは似たような力が働いていると疑っています。でもでもテレビを見て、新聞や本を読むと、涙が止まらない自分もいるのですから、勝手ですよね。メディアが報じてくれなくなったら、やっぱりみんなだんだん忘れてしまうでしょう。悔しいけれど、メディアのこの姿勢はきっとこれからも変わることなくくりひろげられていくのでしょうね。

三月一一日私は昨年に続いて、新聞を四紙購入してみました。昨日、実家の長野に行ったので、信濃毎日新聞という地方紙が見れますので、三月一一日のものを見ましたら、一面ではあっても震災の記事は小さく、ほかの紙面の特集もわずかでした。高知はじめ東日本から離れたところはきっとこんな感じなのかなあ。東京版などは数日前からかなり特集が組まれたり（一一日以後はぐっとまた減ってしまいましたね）はしていましたものね。

最後に前回、発送作業を手伝ってくださったジネットの相馬出身のＺさんという方が手紙をくださいました。その中の１節から。

『…テレビ等をみていると、現地の方々から「東北を忘れないで欲しい」というメッセージがよく流れてきます。私たちは決して忘れてはいないのです。気になっているのです。が、今どんな形で協力したら良いのかがわからないのです。カンパをしたり、東北のものを買ったりそんなことは出来ますが、それ以外の活動となるとなかなか難しいものです。現地との連絡が密に取れ、現地の要望に応じた地道な活動に少しでもいいから協力したいと思っておりました…。』

Ｚさんの率直な物言い、きっと多くの人も同じ気持ちでいると思います！小さな窓口でも、南相馬でこの支援を受け入れてくださっている方々がいることに感謝しながら、初めにＷさんが思ったように、南相馬を見つめてくことが、日本の再生を見つめていくことだと思っています。」

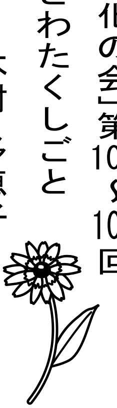
このメールに対してＳさんからも次のようなメールが届いた。

「Ｋさんの、『子どもたちの姿を、自分たちの答えに、自分の物語にはめこんでほしくない。』『震災関連の報道の感動的なお話の多くは似たような力が働いていると疑っています。』という言葉に納得しました。一部のマスコミの本質だと思います。先日、避難区域の方から、東海地方のＴＶ局から新美南吉の「でんでんむしのかなしみ」についてのアンケートがきた

とお知らせいただきました。これは大人向けのアンケートのようですが、「福島県の人々は、震災・原発事故を経験し、今、南吉童話をどう感じられているか。特に代表作「でんでんむしの悲しみ」を今、どうお感じになられるか。」という内容です。彼女はアンケートに答えたところ、電話がかかってきて、「新美南吉は今、それほど読みたいと思えない」と遠回しに答えたにもかかわらず、「でんでんむしのかなしみ」について、ほしいコメントを求めたそうです。福島県人に対してのお心配りは本当にありがたく思っているのですが、「福島の人はこう思うはずだ」という思いこみには、悲しくなります。「東北を忘れないでほしい」と、私も思います。被災地のことを思い続けてくださっている方々には、本当に感謝しています。私は、「応援してください」、「たすけてください」という声を、待っていていただきたいと思っています。福島では、とても長い年月、原発事故と向き合わなければなりません。必要なときに、手をさしのべていただけるのが、いちばんうれしいことだと思います。そのときを、待っていてほしいと思っています。被災地以外のみなさんが、原発事故の悲惨さを忘れないでいてくれることが、私は、なによりうれしいです。」

「東京漢点字羽化の会」第101〜103回例会報告とわたくしごと

木村　多恵子



２０１４年４月の例会（第101回）４月９日（水）
13：30〜15：30、場所　港区ヒューマンプラザ７階第２会議室

岡田健嗣著、「漢点字講習会用テキスト　初級編第７回」の墨字版を70部印刷していただくために、いつもより早い時間に集まっていただいた。

今回のテキストは内容量が多く、前回より時間がかかったようであるが、皆様のご協力により製本まで仕上げてくださった。墨字で62ページ（点字では２２４ページ）。皆様ありがとうございました。

今月は新年度に当たるので、会長にボランティア保険の手続きをしていただいた。

いつものように、朝日「備える歴史学」のグループ編成を決めた。

この、災害に備えての内容の連載は、今特に誰もが心得ていなければならないことなので、２０１４年度にも引き続いている。

「古語辞典」の入力の留意点や括弧の扱い方など、具体的に実例を挙げて、岡田さんが丁寧に説明した。

会員募集については、会場の予約が難しいけれど、夏以降に向けて開けるよう準備することにしたい。

会員のお一人が、お怪我をなさり会員一同心配している。どうぞ一日も早くお元気になって、活動に復帰していただけますように。

漢点字利用者をどうしたら増やせるか。現実に漢字混じりの文章を読み、文字が持つ意味の広がりの大きさに気づき、自分でも書いて、自分の思いを深く表現できることの喜びを知ったなら、漢点字を使いたいと思えるようになるのではないかと、わたしは思うのだが、その第１歩をどうやって理解していただけるか四苦八苦している。

７月の活動予定日を相談した。

２０１４年５月の例会（第102回、５月７日（水）13：30～15：30、ヒューマンプラザ７階第２会議室

「備える歴史学」のグループ編成を組んでいただいた。

２０１４年８月の例会と学習会の日程をおおよそ決めた。

今月は奇数月なので横浜での印刷のお仕事もある。

５月21日にお二人が行ってくださることになった。Ｉさん、Ａさん、よろしくお願いいたします。

「古語辞典」は、木村にも「あ行から、く行まで漢点字で読めるようにＥＩＢファイルをいただいた。この辞典を見ていて、「葱」を古くは「き」と発音していたというのを見つけ、蕪村か誰かの俳句に、畑で仕事をしている人に、道を訪ねると、持っているネギで、「あっちだよ」と道筋を教えてくれた、というような句を思い出した。でも肝心な俳句そのものを覚えていないのが残念だ。なにしろカナ点字の国語教科書なのだから、「葱」とは書かず、「き」と発音通りカナ文字で書いていたので、小学６年の当時は「き」そのものが葱とは分からず、ただ「き」と読んでも何のことかまるで検討がつかず、この妙を理解できなかった。

２０１４年６月の例会（第103回）６月11日（水）13：30～15：30、ヒューマンプラザ７階第２会議室

「備える歴史学」のグループの組み合わせをした。

９月の日程の相談をした。

漢点字協会から、補助漢字の正誤表が届いたことの報告をした。

「萬葉集釈注」の校正のお願いをした。

その件で７月の例会のとき、横浜から詳しい説明をするためにＹさんが見えることを報告した。
会員の募集方法について、横浜での例を報告した。

＊　予告

２０１４年７月の例会（第104回）７月９日（水）
12：00～15：30、ヒューマンプラザ７階第２会議室

２０１４年７月の学習会（第80回）７月19日（土）
18：30～20：30、ヒューマンプラザ第２会議室

２０１４年８月の例会（第105回）８月13日（水）
13：30～15：30、ヒューマンプラザ７階第１会議室

８月の学習会（第81回）８月23日（土）
18：30～20：30、ヒューマンプラザ７階第２会議室

９月の例会（第106回）９月10日（水）
13：30～15：30、ヒューマンプラザ７階第２会議室

９月の学習会（第82回）９月20日（土）
18：30～20：30、ヒューマンプラザ７階第２会議室

わたくしごと

シューベルトの歌曲の魅力を教えられたのは、中学２年か、３年の夏休みに入ろうとしていたころのことである。
教えてくれたのはラジオであったが、わたし自身が積極的に聴こうとしてかけたのではなく、寮生共有のラジオが偶然かかっていて、わたしの耳を強い磁石のように引きつけたのである。
わたしは夏の夜の涼を求めて一人学院内を散歩し、もう９時近いと思うころ、自分の寮に入ろうとしていた。そのときがシューベルトとの出会いである。
「次はシューベルトの歌曲　『魔王』です。バスか、バリトンの人が歌うのが一般的です。今日は、若く新しい歌手と、円熟したピアニストとの見事な演奏を聴いていただきましょう。」と言って、二人の名前を紹介したはずなのに、わたしはどちらも覚えられなかった。
「ゲーテの詩に、１８歳のシューベルトが作曲したもので、あの『野バラ』のような愛らしいものでも、甘い恋の歌でもありません。劇詩と言うべきでしょうか。一人で、語り手と父親と、子供と魔王の４役を歌い分けるという難しいものです。」と前解説があり、ざっと粗筋を紹介した。
「父親が息子を抱いて、暗い夜の森を馬に乗って家路を急いでいます。馬の蹄の音も高く、疾駆してゆきます。
子供は、突然何かに怯え、不安と恐怖の叫びをあげます。

〈父さんには魔王が見えないの？〉
〈何でもないよ。霧が流れているんだよ〉
と、父は取り合いません。
〈かわいい坊や、一緒に遊ぼう〉
〈父さんには魔王の声が聞こえないの？〉
〈落ち着くんだ。枯れ葉にザワつく風の音だよ〉
〈いい子じゃ、行こう、わしと一緒に。うちの娘に世話させる。歌って、踊って、寝かせてあげる。〉
〈父さん、あそこの陰に立ってる魔王の娘が見えないの？〉
〈見えるよ、見える、古い柳が光ってる〉
〈かわいい子供、奇麗な子供、嫌と言うなら無理に連れて行く〉
〈父さん、父さん、魔王が、魔王がぼくにつかみかかって来る〉
父は震えて馬を駆り立て、呻（うめ）く子供をしっかと抱え、やっとのことで家にたどりついた。
腕の中の我が子は、もう　死んでいた。」

わたしは、寮の縁側から上がって、ラジオが置いてある棚の間近に行き、ただ立ち尽くして聴いていた。
歌は、ドイツ語なので、言葉を聞き分けることはできないけれど、薄気味悪いほど優しく囁く声は、一層恐怖を誘い、「マイ　ファーテル、マイ　ファーテル」と必死に叫ぶ子供の声は、わたしの胸を揺さぶり、ドキドキさせる。そして、高く、低く、複雑に鳴り響き続ける、３連音のピアノの音は、ますます不安をかき立てる。恐らくこのピアノの中には葉ずれの音も、風の音も、柳の揺らぎも描写されているのだろう。
〈見えないの？〉
〈聞こえないの？〉
〈見えないの？〉
と、恐怖を訴える切迫感が、父にも伝染し、馬を駆り立てさせたが、襲いかかる魔の手は子供を奪い取ってしまったのだ。
子供ばかりではない。同じ魔の手はわたしの背後にまで伸びて、わたしをも掴み取ろうとしていた。息詰まるその時間は長いような、あっけないような妙な感覚で、歌も、ピアノも無音になり、やや間があいた。わたしはヘナヘナとしゃがみ込んでしまった。
そして、ラジオはわたしを置きざりにして、「次の曲は…」と言ったようだが、わたしの耳には、もう何にも入らなかった。それどころか、わたしはラジオを消してしまいたかった。どうしてみんなは静かにその

まま次の曲を聴いていられるのだろうと不思議だった。できることなら、また、そっと一人で外へ飛び出し、自分の心の不安を沈めたいと思った。

仕方なくラジオが聞こえない洗面所へ行き、かなりの時間を過ごした。ラジオが消された頃を見計らって、やっと自分の床に着いたが、ヘトヘトに疲れていて、魔王の手が、わたしを捕まえようと襲いかかる夢にうなされた。翌日も、その翌日も魔王はわたしを追いかけてきた。

わたしは知った。そうなのだ。これは本当なのだ。死は必ずわたし自身にやってくるのだ、と。

実を言えばこの放送で、誰の訳かは分からないけれど、詩全体を読んでいた。が、ここでは敢えてわたしなりの省略語に留（とどめ）させていただいた。

今回幾つかの和訳を調べた中に、井上正蔵訳で、普通の何気ない言葉がはっとさせた。それは第一段の語り手の部分である。

「こんな夜更けに、風吹く中を、／　馬を飛ばして行くのは誰だ、／　馬には父が子供をしっかり‥大事に、抱えて乗っているのだ」

この「大事に」という何でもないような言葉が、ここでは「しっかり」と「抱えて」のあいだで、際だっているように思えた。我が子を「しっかり大事」に抱かかえているのは当然であるが、一文字一文字、指で漢字をたどっていると、一文字ごとに　素直に感動できる。

「魔王」との出会いはわたしにとって一つの事件であった。うなされることはだんだん減ってきたものの、不安は消えなかった。それなのに、どうしても「魔王」を聴きたくて、それとおぼしき番組に注意を払ったが、奇跡は起こらなかった。

とうとう高校生になったわたしは自宅通学になっていた。そしてある日、ラジオを聴いていたら、「シューベルト」と聞こえ、耳をそばだてると「糸を紡ぐグレートヒェン」と言う。この曲の解説は一切なかったが、「魔王」との曲調は異なるものの、ピアノの３連音符に載せて歌われたソプラノは、不安の中にも期待をも感じさせた。

これは何だろう？糸車が回り続けている。…ああ、どうしたの？糸車はつんのめるように突如止まった。糸が何かに引っかかって止まってしまったの？わたしは今度も戸惑った。

このグレートヒェンとの出会いは、シューベルトと

の二度目の出会いとなった。

グレートヒェン、グレートヒェン、誰だっけ？ああ、ファウスト！ファウストに出てくるマルガレーテ（マルガレーテの愛称は「グレートヒェン」）のことだろうか？

疑いながらも、確認できずに日を過ごした。

そんなある日曜日、わたしが編み物をしているところへ兄の友人が訪ずれ、「糸を紡ぐグレートヒェン」と一言言った。なぜかわたしは虚を突かれ、全身が波立つのを感じた。訳の分からない恥かしさで身動きができなかった。幸いその人はさっさと兄の部屋に行ってくれたのでほっと息をついた。

あの糸車の音と、不安を掻き立てる唐突な終わり方とがよみがえった。

この、兄の友人は音楽に通じている人なので、この人なら、わたしの疑問を解いてくれるかも知れない。けれどもなんとなくお話をするには勇気が要った。とうとうある日、思い切ってお聞きした。

「糸を紡ぐグレートヒェンは、なぜピアノが突然止まるのですか？つんのめりそうになります」

「グレートヒェン、聴いたことあるの？」

「はい、一度だけ」

「そう感じたの？　あの歌詞の内容を知ってる？」

「いいえ」

「調べてごらん」

いったいどうやって調べればいいのだろう。そう簡単にラジオから聴けるとは思えないし、かと言って、このときも図書館で調べる方法など知らなかったし、レコードや本を買ってまで読んでもらうこともできなかった。

「魔王とグレートヒェンを聞きたいんですけどなかなか聞けないんです。」

「じゃあ、今度お兄ちゃんとレコードを聞きにうちへ来ればいい」

そんな訳で、聞かせていただきに兄と伺った。

正直なところ、わたしは魔王を聞かせていただきながら、「これが魔王ですか？」と尋ねてしまった。あの感動とは違って色あせていた。初めて聞いた、あの日の打ちのめされた激しさはなぜだったのだろう。内心のあの日の衝撃についてはなにもうちあけてはいない。

ありがたいことに、グレートヒェンは期待をうらぎらなかった。が、わたしの疑問にはとうとう答えてくださらなかった。

「どうしてこんな不自然な終わり方なのですか？」
「そのうちに分かるよ」
これ以上何も言うな、と言われたような厳しさを感じてわたしも沈黙した。

さらに、わたしは不思議な体験をした。

今度は「魔王」と「グレートヒェン」を追いかけて番組を求めた。やはりどちらとも中々出会えなかった。が、あるとき、ふとラジオをかけたとき、わたしは、あれ？グレートヒェン？と曲の途中から聴いて不思議に思った。なんだかどこかが違う。でも似ている。いや、わたしの記憶なんてあてにならない。これがグレートヒェンだったのか。とにかくよく似ていたので、グレートヒェンに出会ったのだと喜んだ。ところが、曲が終わると、アナウンサーは「ただいまのは『水の上で歌う』でした。」とまるっきり違う曲名を告げた。わたしは驚いた。どうなっているの？グレートヒェンではない。けれど、どうしてこんなに似ているの？確かに今聴いた方が明るかった。グレートヒェンのように、ピアノの低い重苦しさはなかった。だけれども似ている。頭が混乱した。

その後、暫くして謎が解けた。

「今日は珍しい聞き比べを致しましょう。音の高さを変えるだけで曲全体の感じがすっかり変わる例です。」と言って、なんと『水の上で歌う』と『糸を紡ぐグレートヒェン』の2曲を続けて聞かせてくれたのである。わたしには、細かいことは分からない。実際にはそのまま調を替えただけではないと思うけれど、わたしが疑いながらもグレートヒェンと水の上がこんなに似ているとは驚きであった。

あれから何十年も経った最近、ある方が同じ曲を、調を替えて聞かせてくださった。長調と短調の違いどころか、長調同士、短調同士でも主音を替えると、明るさや重厚感がまったく変わるのだということを教えていただいた。

これまでにもう一つ分かったことは、グレートヒェンは、ゲーテの原作『ファウスト』を、グノーが、作曲した『歌劇ファウスト』である。筋書きはほぼ原作通りであるが、ゲーテの小説を読むより、歌劇を聴いた方が、ヒロイン、グレートヒェンの辿った悲劇が、音楽を伴って、一層胸に迫ってくる。

そして、今現在、この2曲は新たな形と意味をもってわたしを捕らえている。「魔王」はますますわたしに近づき、「糸車」が突然止まるように、「死」は前触れもなしにやってくるのだろう。

２０１４年６月21日（土曜）

漢文のページ

出師表（四）

臣本布衣、躬耕於南陽、苟全性命於乱世、不求聞達於諸侯。先帝不以臣卑鄙、猥自枉屈、三顧臣草盧之中、諮臣以当世之事。由是感激、遂許先帝以駆馳。後値傾覆、受任於敗軍之際、奉命危難之間、爾来二十有一年矣。

臣は本布衣、南陽に躬耕し、苟も性命を乱世に全うし、聞達を諸侯に求めざりき。先帝 臣の卑鄙なるを以てせず、猥に自ら枉屈し、三たび臣を草盧の中に顧みて、臣に諮るに当世の事を以てせり。是に由りて感激し、遂に先帝に許すに駆馳を以てす。後、傾覆に値い、任を敗軍の際に受け、命を危難の間に奉じ、爾来二十有一年なり。

先帝の劉備は無位無冠の孔明の草庵に三度も訪れ、もったいなくも膝を屈して当世の政治について相談されたこと（**三顧の礼**）に感激し、帝のために尽くす。魏軍に敗れるという危機に際しては、任務を受けて呉との連合の話をまとめた。以来二十一年の歳月が流れたと、出師の表（出陣の際の上奏文）に記す孔明。

臣ハ本布衣、躬耕シ於南
陽ニ、苟モ全ウシ性命ヲ於乱
世ニ、不リキ求メ聞達ヲ
於諸侯ニ。先帝不以テセ臣
ノ卑鄙ナルヲ、猥リニ自ラ枉
屈シ、三タビ顧ミテ臣ヲ草廬
之中ニ、諮ルニ臣ニ以テセ
リ当世之事ヲ。由リテ是ニ感
激シ、遂ニ許スニ先帝ニ
以テス駆馳ヲ。後値ヒ傾覆
ニ、受ケ任ヲ於敗軍之際
ニ、奉ジ命ヲ危難之間ニ、
爾来二十有一年ナリ矣。

参照図書:『朗読してみたい　中国古典の名文』
渡辺 精一（祥伝社新書）

ご報告とご案内

一　漢点字講習会について

横浜と東京の漢点字羽化の会では、漢点字の学習会を開催しております。

横浜では今年度も例年通り、「ライトセンター便り」と「浜視協便り」に募集広告を掲載していただきました。それに対して、多数のご応募が寄せられました。

そこで以前より継続してご出席下さっている受講者の皆様のご了解を得て、漢点字の基礎からお話しさせていただくことに致しました。継続しての受講者の皆様も、再度原点に立ち返っていただくことで、ご自宅での学習に厚みを持たせていただけると、好意的に受け止めていただいております。

今年度の第一回目は、５月25日(日)、横浜市社協・ボランティアコーナーを会場に、開催致しました。小規模な会場でしたので、ご出席者は20名余りでありましたが、誠に盛大に行うことができました。

オリジナルのテキストを用いて、まず漢点字のご紹介からお話を始めました。その概要をご紹介しますと、

①従来の日本語点字には、漢字の体系がありません。

②戦後復員して大阪府立盲学校に奉職された故・川上泰一先生が①の事情をお知りになって、漢字のない日本語は日本語とは言えないとお考えになって、漢点字の開発に着手された。20年余りの研究の末、１９６９年に、『漢点字』を世に問われた。

③漢点字の構成は、漢字の構成に従って作られたこと。すなわち六書に従って、原則として「象形文字」と「指事文字」に対応する漢点字を「基本文字」と位置づけて、「会意文字」と「形声文字」に対応する漢点字を「複合文字」と位置づけた。

④点字の校正は６つの点、縦３点・横２列のであるから、２点以上の組み合わせは57通りできる。その57個の点字符号を「第１基本文字」（１マス漢点字）と位置づけた。

⑤日本語文は通常漢字仮名交じり文であるから、漢字とカナ文字が瞬時に触知・弁別されなければならない。そこで川上先生は英断された。

⑥カナ文字は従来通り⠿の６つの点のパターンを使用する。

⑦漢字は⣿の８つの点を採用する。

⑧８つの点のうち最上点の⣀を漢点字符号と呼び、⡀を始点、⢀を終点と呼ぶことにした。そして漢点

字の形を、１マスのものを⣿、２マスのものを⡿⢿、３マスのものを⡿⠿⢿とした。これによって漢字仮名交じり文の漢字とカナ文字とを即時に弁別し了解できるようになった。

⑨言い換えれば、従来のカナ点字に始点と終点を付けることで、漢点字符号ができることになる。たとえばア行では、「イ⠃（⣃糸）、ウ⠉（⣉家）、エ⠋（⣋言）、オ⠊（⣊頁）」となる。

⑩以上は基本文字の１部であるが、これらを組み合わせることで、複合文字（会意文字・形声文字）の幅を広げることができる。

以上、駆け足でご紹介しました。ご興味をお持ちの方は、ご一報下さい。

なお東京でも同様に、学習会を開催しております。皆様のお声をお待ちしております。

二　音訳版『常用字解』の音訳作業が急ピッチ

漢点字版『常用字解』の完成を受けて、そのノウハウを生かして、同書の音訳版が作れないかと、当時墨田区立あずま図書館（現・ひきふね図書館）にお勤めの山内薫様にお願いして、音訳者の皆様に呼びかけていただきましたところ、多くの音訳者の方からご応募をいただきました。活動を開始してから早くもこの６月で３年の時日を重ねたことになります。この間、誠に文字通り、瞬く間に過ぎ去った感が否めませんが、徒らに時を労したわけではございません。

ご参加下さっている音訳者の皆様のお住まいは、広域に及んでおります。日常的に意思の統一を図るのは、容易いことではありませんでした。その中で、ある地域のリーダーの方が、一定の基準となるマニュアルを作成して下さり、それに沿ってお一人お一人が「文章化」という作業を行って下さっておられます。

「文章化」とは、原本を読み下すだけでは足りない部分、『常用字解』では文字や字形の説明、あるいは文字や字形の変遷の説明などを原本に織り込んで、しかも原本の流れを妨げることのない文章のモデルを作成することを言います。この「文章化」された文を読み下すことによって、聴読者の皆様の過不足のない理解が得られることが、この作業の目的です。

そろそろこのような基礎工事を終えて、皆様の目に触れる場所に、その一つの形を呈示させていただこうという気運が、ご参加の音訳者の皆様の間に、漲って参りました。

ご期待下さい。

なお不定期ではございますが、打ち合わせのための会合を持っております。会場は、墨田区立ひきふね図書館です。ご関心をお持ちの方は、ご遠慮なくお出かけ下さい。

編集後記

▼台風8号が去って、青空が広がり、真夏の太陽が照りつけます。しかし、南木曾や山形の水害の様子を聞くと、何ともやりきれない気持ちが一杯です。今年はエルニーニョの影響で梅雨明けが長引き、冷夏になるかも知れないという予報もありますが、この暑さからはとてもそんな様子は想像できません▼岡田さんの「案内」にあるように『常用字解』の音訳作業が進んでいます。音訳には、原本を読み下すだけでは理解されにくい部分を、耳から聞いただけで理解できるように、文字や字形の説明をすることが必要です。これは漢字1字ずつについてその形や変遷を説明する文章を作ることです。担当者お一人お一人が、自分の担当する範囲の漢字について、そういった説明文を作製し、それを岡田さんに見てもらっています。それらのやりとりはメーリングリストを介して行われ、私もそのメンバーに入っているので、皆さんのやりとりを目にしています。1つの文字の形を説明するにも適切な表現方法を模索して、何度もやりとりが行われています。そういう作業に、真剣に取り組まれている音訳者の皆さんの熱心さに、頭の下がる思いです。（木下　和久）

（有）横浜トランスファ福祉サービス

障害者自立支援法の下、障害者にガイドヘルパーを派遣して、外出を支援しています。対象は、横浜市在住・在宅の、視覚・肢体・知的重度障害者。

常時募集・ガイドヘルパー：資格・ホームヘルパー２級以上、および視覚・肢体障害者移動介護研修修了。

業務概要：上記障害者の外出支援。詳細は担当・柳田まで。

〒231-0063横浜市中区花咲町1-46-1
GSプラザ桜木町1104
電話:　045-263-0306
FAX:　045-263-0316

Ｅ－ＭＡＩＬ（岡田健嗣）：okada_tr_eib@ybb.ne.jp

横浜漢点字羽化の会　　ＵＲＬ：http://www.ukanokai-web.jp/

《表紙絵　　岡　稲子》　　　次回の発行は10月15日です。

※本誌（活字版・DAISY版・ディスク版）の無断転載は固くお断りします。